

新米教師1年目の振り返り

苫小牧市立啓北中学校山なみ分校
教諭 榛 伸悟

平成25年4月から採用され、初任者としての一年が終わり、教師として二年目を迎えた。子どもたちとの距離感がわかってきたのと同時に、コミュニケーションをとっていく上での課題や困っていることなどが少しずつ見えてきており、対応していく中で難しさを感じている。現在、情緒学級在籍1名、知的学級在籍3名の担任をしており、そのうち知的学級の3名については養護学校適の答申を受けている。そのため、情緒学級の生徒と同じクラスとして共存することが難しく、個別での対応が多い。そこで、事例を交えて自己の指導を振り返り、今後自分が教師として何を目指していくのかを述べていきたい。

①ケース及び対応、課題

ケース1 知的学級在籍 14歳男子 自閉性障害 IQ35（ビネー検査）

- ・未経験の行事や、見通しの立たないことに対しての不安が強い。
→板書やカードなどを利用して事前に指導、約束事の確認をした。
- ・登下校時に交差点付近で立ち止まり、何度か青信号をやり過ごす。行事の前になるとその傾向は顕著に出てくる。
→毎日立ち止まりそうな場所で登校指導を行った。通学前後に生徒に変化はなかったか、保護者と確認をした。
- ・パニック時は大人一人ではおさえきれないほど大きな力で暴れることがある。
→約束事を決め、座らせてクールダウンできるように声かけをした。落ち着いてからどう行動するべきだったかを確認し、約束した。
- ・独り言が多く、好きなフレーズや歌などを口ずさんでいる。
→場所や状況を説明し、静かにしなければならない時を指導した。
- ・気分によって、学習の進度や行動の速度が変わり、何も言わずに止まってしまうことがある。
→細かく声をかけ、集中力が学習に向けられるように指導した。また、できないことを無理強いするのではなく、授業内で「がんばり目標」を一つ設定し、クリアできたら一つごほうびをあげるよう、配慮した。

課題

- ・表情や行動から心情や困り感が読みにくく、こだわり行動もその都度変わっていつているため、どこが困り感を生んでいるのか理解が難しい。
- ・指示をしても理解度が低く、定着させるまでどのように指導すべきか難しい。
- ・パニック時や興奮時の自己対処法を定着させたいが、感情をコントロールできる段階まではいっていない。
- ・作業能力は高いが、指示を正確に聞いて行動することが難しい。

ケース2 知的学級在籍 14歳女子 プラダウィリー症候群 IQ37（ビネー検査）

- ・特性上、肥満や糖尿になりやすく食事量を減らしている。
→「もっと食べたい」と要望してくるときも、体のためにやっていることを説明し指導

した。本児も小学校の時から取り組んでいることもあり納得して食事することができた。

- 合併症として、脊柱側弯、睡眠時無呼吸も併せもち、寿命も短いと医師に診断されている。
→保護者と連絡を密に取り、体調を観察した。年々体力も減退傾向にあるため、身辺の処理や移動に時間がかかるようになってきており、体力・体調を考慮して、学習しなければならない。
- 誰とでも仲良くなることができるが、適切な距離感で接することができず、自分だけ楽しくなりすぎて友達を叩く、暴言を吐くなどのトラブルが起こることがある。
→個別に呼び出し、事実確認後に被害生徒へ謝罪をするように指導している
- 上記トラブルを指導しても、事実を認めずに頑なにごねて、指先をくわえ、黙り込んでかい離状態になる。
→目を見て話すように心がけ、一つ一つ状況を確認し、認められるようになるべく柔らかく対応している
- 気分が乗らなかつたり疲労が溜まると廊下に座り込んでしまい、指示も聞けなくなってしまう。
→しばらく落ち着くまでそっとしておいて、自発的に動けるのを待ち、出来たら褒めるようにしている。かい離状態に強い指導を行っても、指導が通らないばかりか、余計殻にこもってしまい次の行動に進めないことがよくあったため、不適応行動については一旦「無視」し、落ち着いて話ができるようになってから正しい行動について確認した。

課題

- 寿命と向き合いながら、進路設定や今後を見つめ、楽しい学校生活を送らせるために許してしまうところと、指導しなければいけない所の境目が難しい
- 体力が減退傾向にあり、一日を通して集中力が続かなくなっている
- 本児の特性を踏まえた上で嘘や手が出てしまうことを止める際にどのように指導すべきか

②特別支援教育の現場からの気付き

- 一番伝えたいことは褒めて伝える
→できなかったことや失敗したことを責めても根本的な解決にはならないと気付き、不適応行動があった場合はまず、落ち着いて行動ができたことから褒めた。生徒には「これをすれば褒められる」という気持ちが芽生え、不適応行動が少しずつ減った。
- 「あれしろ」「これしろ」はあれもこれもしたくなる
→一指示一行動を基本とすること、T1が指示や説明をしている場合は、つまずきがない場合は横から口を出さないように心がけた。いろんな方向からたくさんの人間から言われることは、どんな人間にもストレスになりうることである。
端的に、要点を説明できるように声掛けを工夫した。
- できないことややらないことには理由がある
→特別支援教育において（私の経験上）場面緘黙や拒否行動には必ず根底には理由がある。「やりたくない！」となっている場合にはどこかに拒否の原因があり、止まっている場合にも何らかの原因が考えられる。そこで、できないことを無理に取り組みせ

るよりも原因に向き合うように努めた。そこから生徒の傾向が分かってくるようになり、課題提示に必要な配慮や提示方法も個に応じて対応することができた。それぞれに設定した課題を提示することで、学習のレベルに差異があってもストレスなく学習に取り組むことができるようになってきた。

- ・生徒の活動を待つのも重要な成長の時間

→周囲の人間に合わせて行動することはとても大切なことだが、それ以上に生徒自身が考え、行動し、達成することも見守ることはもっと大切だと考える。自分の力で未知に挑んだり、課題解決をしようと努力しているときに、教師の一言で歩みを止めさせてしまう可能性もあるのではないかと感じた。

③これから目指すべき教師像

- ・テストのための授業ではない、その先の社会に向けて「生きる力」をつける授業を

→課題に「どう」取り組み、「どんな」考え方で、「何」がわかったのか、課題解決を通して探究する授業へ。

- ・教師はファシリテーター

→ファシリテーター＝促進者 教師は、主体的に取り組む生徒の活動を促進する役割でいること。教えすぎないことも大切な役割であり、失敗→解決への方法の模索→成功を導くことで課題解決学習が成立する。

- ・「わかりやすい」は見えることから

→本時の課題、授業の流れは導入時に視覚化して伝える。見本は生徒から出す・ポイントを伝えることで課題を炙り出す→課題となる動きをVTR化し上映して次の活動に活かす→「できた」が生まれる

- ・「ほめる」「認める」「励ます」

→生徒指導の3機能（①自己存在感・自己有用感の醸成②共感的人間関係の育成③自己決定の場の設定）を指導の随所に意識する。生徒同士が互いを「ほめ」合って、共感的人間関係を築き、生徒を「認め」て自己有用感、自信を持たせ、生徒の活動を「励まし」て自発的な活動の背中を押す。

生徒への前向きな関わり方が生徒の自発的な活動を促し、自ら考え、自ら学ぶ姿勢を生む。

以上が新米教師として一年間駆け抜けた中で見えてきたものである。何より私が大切にしたいのが、生徒一人の為にどれだけのことをしてあげられるかということ。その工夫や支援がやがて生徒自身や周囲の人間にも良き変化を与えられるのではないかと考えている。まだまだ知識も経験も少なく、絵空事で終わってしまっていることが多いが、出来ることは何でも挑戦し、失敗も含め自分の経験値としたい。「学び続ける教師」とは、生徒のそばで生徒の為に奔走することであると私は考える。私たちにとって「教える」今は何度でも巡ってくるが、生徒にとって「学ぶ」今は一瞬一瞬が一度きりである。そこに深くかわらせていただける感謝の気持ちを何年たっても忘れずにいたい。それだけ尊く責任のある仕事だということはこの振り返りで再認識した。